

## はじめに

1995年。この年が、阪神・淡路大震災が起きた年であり、オウム真理教による地下鉄サリン事件の年であるということは誰もが知っている。1995年は、主にこの日本戦後史における最大級のふたつの事件をもって「戦後史の転機となった年」とされる。

そもそもこの年は、ふたつの厄災がなかったとしても、戦後史の区切りとして語られることがあらかじめ決められていた年でもあった。なぜなら1995年は、日本の敗戦から50年を迎えた年でもあったからだ。

だが自然災害である震災と、人為的な集団犯罪であるオウム真理教事件が重なった年という偶然だけをもってして、軽々に1995年が戦後史の転機であると論評することは避けないと思う。戦後50年という数字上の区切りにもまた、それ以上の意味はない。

では、1995年は何の転機でもないのかというと、それもまた違う。

社会学者の中西新太郎は、ふたつの厄災があった1995年とは「これまでと同様の社

会は続かない」ということを日本人に印象づけた年であると指摘している（中西新太郎編『1995年——未了の問題圏』）。

1980年代末のバブル経済は、1991年初頭に、土地価格の暴落という形で崩壊した。これは、単なる景気循環の波ではなく、以後の長い不況の始まりだった。1950年代末から始まった高度経済成長期の背景には、55年体制と呼ばれた安定した政治体制があったが、その体制が崩壊したのは、自民党が下野した1993年のことだ。

もちろん、世界情勢に目を向ければ、1980年代末に東欧諸国が次々と民主化し、1991年にはついにソ連が崩壊する。それまでの世界を覆っていた米ソ両陣営に分かれての東西冷戦が終了しているという時代の分水嶺である。

これらは、以後の社会がこれまで通りには続いていかないということを人々に予感させるには十分な変化だった。だが、多くの人々の生活にとって、激変と呼べるような変化が起きたわけではない。バブル経済の崩壊も、身にしみて不況が感じられるようになるのもっと先のことだし、55年体制の崩壊といっても、何かその日から変わるといった性質のものではなかったのだ。

ただ当時の日本人が抱いていた、「何が起きても不思議ではない」「これまでの常識は通用しない時代」という漠然とした予感に、震災とオウムというふたつの厄災が重なることによって「変動期の到来」という強い印象が突きつけられたのだ。

1995年とは、それ以前に起こっていた日本社会の変化を強く認識する機会となった転機の年なのである。

本書は、1995年を「戦後史の転機となった年」という刷り込みからいったん解放し、個別具体的に政治、経済、国際情勢、テクノロジー、消費・文化、事件・メディアといった具合にあらゆる側面から輪切りにして再検証してみるといった趣旨のものである。

1995年は、政治でいえば、村山富市とみいちという社会党のリーダーが首相を務めていた時代だった。経済を見ると、円の戦後最高値を記録した年だ。ただし、この最高値は、2011年に再更新される。国際間貿易という視点で見ると、WTO（世界貿易機関）が設立され、それまでGATT（関税・貿易一般協定）として取り組まれてきた貿易の自由化協定が、国際機関という形で引き継がれたのがこの年のことである。それ以前のモノを中心とした取引の時代から、サービスや知的所有権が海を越えて流通するグローバル化の時代に突入していた。アメリカでは、1995年はIT関連株価を基調とした好景気の入り口の

時期であり、その後のアメリカの金融経済に大きな影響を与えるロバート・ルービンがクリントン政権の財務長官に就任した年でもある。

国内の労働関連では、非正規雇用が増えるきっかけをつくったとワルモノ扱いされている日経連（日本経済団体連合会）の「新時代の「日本的経営」——挑戦すべき方向とその具体策」が発表されたのも1995年。「就職氷河期」という言葉が流行語となったのは、前年の1994年だが、のちに「ロスジェネ世代」と呼ばれる就職に苦労した年代の先頭がこの当時の就職世代に当たると言われる。団塊ジュニア世代のど真ん中で、もっとも人口の多い1973年生まれ（209万人）は、1995年に22歳になった。つまり、大卒で浪人、留年がなければ就職活動にかかっている時期だ。ちなみに、筆者はその1973年生まれである。

文化の面で見ると、『新世紀エヴァンゲリオン』がテレビ放送された年でもあり、『ドラゴンボール』の連載が終わった年でもある。スポーツでいえば、震災で被災した神戸を拠点にするオリックスが市民の熱い応援を背にパ・リーグ優勝を果たし、野茂英雄ひろおが海を渡ってメジャーリーグに行き、相撲では若貴兄弟（若乃花・貴乃花）が直接対戦を果たした年だ。

そして、もちろんこの年を検証するにあたり、阪神・淡路大震災とオウム真理教による地下鉄サリン事件を無視することはできない。だがとりあえず、とっかかりの時点で目標としておきたいのは、「阪神・淡路大震災とオウム事件以外のことも視野に入れた1995年の検証」である。

社会学者の鈴木謙介は、1995年に戦後の終わり、経済成長時代の終わりなど「何かの終わり」を見出す人と、インターネット時代、雇用崩壊時代、ポストエヴァ現象などといった具合に「何かの始まり」を見出す人とのふたつの人種がいることを指摘している。転機であるということは、この時代に始まったものとは何かを見極める作業でもある。

ちなみに、歴史を縦でなく、横に読もうという試みは、吉崎達彦が『1985年』にて行っている手法を真似たものである。

「歴史上のある年を取り上げて、政治、経済、社会、文化などさまざまな面から描き出してみよう。縦に読むときは違い、新鮮な景色が見えるであろうし、意外な発見があるかもしれない」と吉崎はまえがきに書いている。本書は、これを1995年において試みるというものだ。

この手法はいつかチャレンジしてみたいと思っていた。その場合、取り上げるのであれば1995年以外ないだろうとは、漠然と考えていたことだった。吉崎が取り上げた1985年は、プラザ合意の年であり、バース・掛布<sup>かけふ</sup>・岡田が3連続バックスクリーン本塁打を打ち、阪神タイガースが優勝した年であり、日航機墜落事故があり、つくば科学万博が開催された年だった。歴史として切り出すには、おもしろい年であるのは間違いないし、切り出す側（書き手）の手腕も見事だった。

1995年は扱い方次第では、1985年以上に興味深い年になるポテンシャルを秘めている。もちろん、それを切り取る書き手の手腕次第ということだ。吉崎は、まえがきにこう書いている。「最悪でも、いささかの懐古趣味を満足させることは出来るだろう」。本書は、この姿勢に倣<sup>なま</sup>おうと思う。最低限、懐古趣味を満足させるものにできるのではと。

## 1995年【目次】

はじめに

003

第1章 政治——ポスト55年体制の誕生

013

村山総理がホームページから世界にごあいさつ／「インターネット」の普及段階は？／新聞も放送局も広告会社もつぶれる／ポスト55年体制の誕生／政局のキーマンであり続ける小沢一郎／小選挙区制の導入と派閥政治の終わり／しよががない、器でない首相の誕生／村山時代の社会党の分裂騒動／迫られる社会党と自民党の変化／無党派旋風——青島幸男、横山ノックが知事当選／青島都知事誕生と都市博の中止／あの政治家の1995年

第2章 経済——失われた20年の始まり

041

経済白書が示す1995年の問題／大失業時代の始まり／大問題に発展した二信組事件／金融崩壊と住専問題／不況時の円高と市場開放／アジアの台頭と村山談話のつながり／自由化の生んだ「焼酎vsスコッチ競争」／蒸留酒戦争に勝ったのはどっちだ／米の自由化と輸入米の登場／ビール系飲料の出

荷数と20歳人口のピーク／ビール会社の競争時代と団塊ジュニアの成人／低価格競争の時代／人口推計で見る1995年と自動車メーカーの苦戦／若者の意識の変化と木村拓哉の時代／トヨタ、日産それぞれにとつての1995年

### 第3章 国際情勢——紛争とグローバル化の時代 <sup>075</sup>

イスラエル・ラビン首相の暗殺／オスロ合意とクリントンの外交の是非／ニューエコノミー——IT株で沸いたアメリカ経済／ヨーロッパ統合とフランスの暴動／「クルブリタニア」とサッチャーの改革／ユーゴ紛争、そしてテロリズムの時代／ユナホマリーのテクノロジー、消費産業批判

### 第4章 テクノロジー——インターネット社会への転換 <sup>091</sup>

家電の街からパソコンの街へ／その後の秋葉原の転機／ウインドウズ95の発売は事件ではなかった／秋葉原、カウントダウン祭りの現場／アップル史上もつとも落ち目の年／ビル・ゲイツにも見えていなかったインターネット時代／発展しなかったインタラクティブテレビ／小室哲哉、マルチメディア戦略を語る／次世代ゲーム機戦争／プレイステーションの勝利／携帯電話の普及とPHSの登場／ハ

イジャックと不倫恋愛と移動体通信の技術／1995年にジョブズは何をしていたか／『トイ・ストーリー』の大ヒット／テクノロジー・メディア企業再編の時代

### 第5章 消費・文化——オカルトと自己喪失の世界 <sup>123</sup>

プリクラ登場と女性向け商品のヒット／ストリートの文化とエアマックス狩り／サイコサスペンスからバイオホラーブームへ／ポジティブ・シンキングの日本版の普及／『新世紀エヴァンゲリオン』が初放送／「がんばっても、意味がない」という世界観／『週刊少年ジャンプ』の最盛期／ダウンタウン政権奪取の年／大型CDショップと通信カラオケの登場／ドリカムとドライブデートの時代／日用品であるクルマを描くドリカム／ミュージシャンの社会的責任とミスチル／時代が追いかけてくる／ノイギミックのノベルティソングの時代／アイドル不在の時代／レコード街だった時代の渋谷と渋谷系／王子様だった小沢健二／スキヤットマンにマライア、そしてビートルズが新譜／突然降ってわいた天才イチロー／「がんばろうKOBÉ」神戸オリックスの優勝／野茂がメジャーで活躍／伊達、松岡の活躍と若貴時代の頂点／総合格闘技の前夜とジョーダン復帰、ラグビーW杯

### 第6章 事件・メディア——大震災とオウム事件のあいだ <sup>169</sup>

戦後最大、未曾有の大震災／機能しなかった危機管理システム／被害者の過半数が高齢者／ボランテ

イア元年と田中康夫の変化／日常と非日常が隣り合わせの被災地／震災から1カ月を経た新聞・メデア  
イア／テロはある朝突然に／毒物はサリン、オウム真理教が捜査線上に／日本社会 vs オウムの全面  
戦争／社会の中枢にまで潜入するオウム信者／近づくXデー／麻原逮捕と報復の懸念／小林よしのり、  
宅八郎の『SPA!』誌上オウム代理戦争／その後のオウム事件／1995年、誰もがオウムに夢中  
になった

あとがき

207

年表——1995年の主な出来事

215

参考文献

219